

愛知県乾坤院・長円寺所蔵の『伝光録』——平成二十九年年度研究調査報告

鶴見大学仏教文化研究所客員研究員 尾崎 正善

はじめに

当研究所は、伝光録研究会を立ち上げ、爾来四年にわたり『伝光録』の諸本対校翻刻作業を行っている。その結果は、「鶴見大学仏教文化研究所共同研究成果報告書・瑩山禅師『伝光録』——諸本の翻刻と比較——」（一）～（三）として毎年刊行され、今年度は（四）が刊行される。

また、そうした翻刻作業のためには、原本の閲覧・撮影が不可欠と考え、昨年度より『伝光録』写本の収集も行っている。

昨年度は、石川県龍門寺・永光寺の史料調査を行ったが、今年度は『伝光録』最古の写本である乾坤院本と、その関連が指摘される長円寺本の調査を行った。また長円寺に関しては、関連する史料の閲覧・撮影も行い、充実した史料調査となった。以下、その調査に関する報告である。

一、調査概要

①日程 平成二十九年九月十二日～十三日

◎九月十二日

名古屋市立博物館集合

午後一時から三時まで乾坤院本『伝光録』調査

知立に移動、知立泊

◎九月十三日

知立より西尾に移動

九時から十二時まで岩瀬文庫にて長円寺本『伝光録』・『正法眼蔵随聞記』その他関係する史料調査
岩瀬文庫より豊橋駅へ移動、横浜への帰路に就く

② 調査場所

名古屋市博物館（乾坤院史料）（愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通）

西尾市岩瀬文庫（長円寺史料）（愛知県西尾市亀沢町）

③ 調査対象

乾坤院本『伝光録』・長円寺本『伝光録』・その他関係史料

④ 参加者

木村清孝・下室覚道・池麗梅・尾崎正善・古瀬珠水・横山龍顕

一一、調査成果

① 乾坤院本『伝光録』

『伝光録』五巻二冊の調査、及び収納箱と『血脈集』『小師牒』の確認を行った。

乾坤院本『伝光録』は、愛知県知多郡東浦町・宇宙山乾坤院所蔵の史料であるが、現在は名古屋市博物館に寄託されている。なお、乾坤院は、水野家の菩提寺であり、徳川家康の生母である伝通院が祭られていることで有名である。

乾坤院本は、永享元年（一四二九）以降に、同寺二代芝岡宗田らが書写した現存する最古の写本で、本研究会における第一史料である。この史料に関しては、カラーの影印版が存在し、それを底本として作業を進めているが、矢張り原本を直接見ることににより、明らかになつた点が多く存在した。

まず、主にこれまでの判読不明箇所を中心に確認作業を行った。そこでは、写真では明らかで無かつた、裏打ち補修の確認が出来た。それは、これまで判読できない文字は、実際には虫損・欠損による結果であつたが、丁寧な補修がなされているために、逆に欠損であることが判別できない結果となつていたのである。

また、合わせて今後の撮影に關しての相談をおこなつた。これは、当研究所でのデータ収集の一環をなすものである。なお、この箱の蓋の表には、以下の様にある。

伝光録 二冊

血脈集 一冊

小師牒 一冊

三尊傳 二冊

このうち、『三尊傳』に關しては、確認できなかった。

また、蓋の裏には、この箱を作製した経緯が書かれていた。

現住本院龍源靈樹代新添宮

施主石濱村水野嘉兵衛憲正

維時延享四年丁卯孟春吉旦

②長円寺本『伝光録』

『伝光録』五卷五冊の調査及び撮影。本書は、寛永十四年（一六三七）、暉堂末恵が書写したものである。

長円寺本『伝光録』は、西尾市貝吹町・万灯山長円寺の史料であるが、現在は同寺史料が一括して、西尾市岩瀬文庫に所蔵されている。なお、長円寺は、初代京都所司代板倉勝重家の菩提寺として、また最古の『正法眼蔵随聞記』写本を所蔵することでも有名である。

この写本は、江戸初期のもので、現在知られる『伝光録』写本の中では、乾坤院本・龍門寺本・松山寺本に次いで四番目に古い貴重な史料である。系統としては、乾坤院本の影響が強いと考えられるが、今回の史料調査で全編撮影をすることができたので、改めて検討することを計画している。

③長円寺所蔵史料

長円寺所蔵の史料に関しては、西尾市が行った調査報告書が刊行されている。

西尾市教育委員会事務局文化振興課編『板倉家菩提寺万灯山長圓寺文化財総合調査報告書』解説編、目録編上・下（二〇一五年三月）の三冊である。

その目録により、事前の申請を行い以下の様な多くの貴重な史料を閲覧・撮影することができた。

長円寺本『正法眼蔵随聞記』・月舟和尚定規・永平寺瑞世関係史料・羅漢講式祭文・回向双紙関係史料（荒神諷經回向・布薩回向・祈祷回向等）・切紙関係史料（為亡者授戒法・嗣書焼却法・没後作僧儀式等）

おわりに

以上のように、愛知県下の『伝光録』写本及び関連史料の調査を行った。

今後も、『伝光録』諸本の基礎データ備えた研究所となるべく継続した史料調査、収集事業を行う予定である。

註（１）田島毓堂「伝光録諸本文の研究（三）——乾坤院本と長円寺の関係」、『印度学仏教学研究』第三六一一、昭和六十二年。